

KAC TRIAL PROGRAM Vol.1 DANCE

「ふたりきりの楽園」

アダムとイヴのように

男女ふたりが舞台の中央に進み出る。どちらも若く、姿形が美しい。合わせ鏡越しに相手を認めるように、深く、貪るように見つめ合う。互いの存在、その身体と、内面の魂を語る瞳が全て。言葉はいらない……その純粋な思いのあかしのよう、それぞれの白く塗られた唇は固く閉じられている。

会場には音楽が流れはじめる。メロディというよりは、人間の内なる骨の鳴る音や血潮のめぐりを響かせるような野性的な調べ。それが心地よい。荒っぽく、冷ややかで、しかしどこか甘い旋律。その流れに乗って、ふたりは、滑るように踊り始める。

若いふたりの身体からは、踊ることの喜び、共にあることの幸せが伝わってくる。あなたは、わたし、わたしはあなた…息はぴったりと合い、手足の動きはシンクロし、瞳はそこに映る自分自身の姿だけを見つめる……舞台上に、タイトル「Yard(庭)」が象徴するかのようなふたりだけの楽園が出現する。エデンの園に出現した、原初の男と女、アダムとイヴ。ふたりは、今、この小さな世界に存在する、唯一の「男と女」なのだ。

古い小学校の講堂を劇場とした小さな舞台は、閉鎖的かつ夢想めいた様相をしないで帯びてくる。舞台の真ん中には壇上へ上る階段があり、その周りだけがほの明るい。階段を離れると長方形の舞台は、隅に行くほど暗くなる。ふたりは決して闇へ近づかない。光の射す場所で踊り続ける。その踊りを見る者にふしぎな快感をもたらす。光と影が調和したハーモニー。ふたりはそれを、たがいの身体でもって奏でてくれる。

しかしそこに少しずつ不穏がしのび寄る。一卵性双生児のように吐く息さえも一つに重ねあわせ、呼応していた動きはタイミングがずれていく。合わせる視線が微妙に逸れ、手指の振りがわずかに遅れ……そして、靴が脱げる。先ほどまでの共鳴のリズムは不協和音を奏で始め、ついには、男は隅の暗がりで見つめるだけになり、踊りをやめてしまう。

女は孤独に踊り続ける。一人になっても彼女は美しく、むせかえるような若さであふれている。長い艶やかな黒髪先から、靴下に包まれた形の良い足指まで、清らかな女性性が感じられる。“楽園”で独り、雨乞いの巫女のように静かに舞う彼女を、私たちはどこか悲しいような気持ちで見つめる。ふたりはもう共には在れないのだろうか。

と、そこに新たな光が射す。文字どおり、舞台中央の階段の上、壇上の後ろにある扉が開かれ、そこから金色の光が暗い講堂を照らし出したのだ。それはまるで雨雲の切れ間から

差し込む黄昏の光のように感じられる。きらきらと輝く黄金の階段を、女は軽やかに駆け上がる。と、男が動く。階段の反対側から、彼も壇上に駆け上がる。アダムとイヴは光の中、手と手を取り合い扉を開け、旧世界を後にして新しい世界へと向かうのか。それとも、ここに、ふたりだけの楽園に留まるのか……。

答えは明示されない。壇上で、逆光に包まれながら再会する男と女。そこでもやはり、言葉は発せられない。ただ見つめ合い、ゆるし合い、向かい合って再び踊りはじめるふたりの美しい影絵のようなシルエットに暗闇が降り、舞台は幕を下ろす。しかしこれはクローズドエンドではない、オープンエンドであり、ふたりの物語りはまだ続くのだと、そう予感させてくれる作品だった。

大山 縁